

## 『マクベス』における悪魔観

— ジェイムズ時代イングランドの近代科学思想の進展を中心に\* —

石 橋 敬太郎

## Witchcraft in Macbeth

—Development of Modern Scientific Idea in Jacobean England—

Keitaro ISHIBASHI

## 序

従来のシェイクスピアの『マクベス』論は、主に劇中の魔術が現実世界の「悪」を表象しているかどうかを論じてきた。その議論に対する解答は、ピーター・ストーリーブラス (Peter Stallybrass) の論考で一応の決着をみたように思われる。彼によると、劇中の魔術は現実世界の「悪」を反映しておらず、イングランド国王ジェイムズ一世の父権的な政治体制を揺るぎないものにするための社会的な戦略を意味する。つまり、ストーリーブラスは、劇中の魔術を父権制度からの逸脱と考え、魔術に頼るマクベスの死にその制度の合法性をみてとる<sup>(1)</sup>。

確かに、魔女による予言を信じて殺人を繰り返すマクベスは、父権社会を脅かすアウトサイダーとなるが、最終的に殺害されることで元の父権社会に回収されてしまう。問題は、マクベスやバンクォーが魔術を幻覚と考えて、当時の悪魔観を疑問視したことにある。彼らが魔術を疑問視していることは、それを行使する悪魔の存在を疑っていることになる。言い換えれば、神に敵対する悪魔の存在が、神の代理人たるジェイムズの政治理念を合法化しているのであれば、劇中で悪魔の存在が疑問視されることは、彼の政治理念が根底から揺さぶられていることを意味するのではなかろうか。

この問いに答えるには、当時の悪魔観を考える必要がある。宗教改革以後のイングランドでは、呪術師、魔術師、魔女などは悪魔の手先と考えられ、異端者として告訴された。なるほど、マルティン・ルターがカトリック教にみられた、神に敵対する悪魔の存在を否定し、宗教改革を推し進めた事実を背景とすると、彼らが異端者扱いはされたのは当然のことであった。しかも、呪術師たちは、他人の生命を犠牲にするか、国家ないし自己の未来を知ろうとする野心的な依頼人の求めに応じて、霊を呼び出したのだから、魔女裁判にかけられたのもうなずける。

ところが、サー・フランシス・ドレイク (Sir Francis Drake) が大航海から財宝を満載してイングランドに戻ってきた1580年代以降、これまで悪魔と目された人物や魔術に新たな見解が現れてきた。この時代の大航海に成功をもたらした要因の一つは、経験主義的な実験を拠り所とする科学技術の進歩であった。近代科学思想の現れである。応用科学に基づく天文学や地理学の進歩は、従来のポリティックスを支えてきたオカルト主義自然哲学の権威をくつがえすことになり、保守的な政治体制を維持する者にとって威嚇となり始めたのである<sup>(2)</sup>。

オカルト主義自然哲学とは、要するに、自然界の万物はすべて神によって生命を与えられており、神格を与えられているものだから、自然界で生じることを理解しようとする場合、まず自然界に関する知識を理解しなければならない。そのためには、占星術、錬金術、数秘学といった神秘的な学問を極めなければならないというものである<sup>(3)</sup>。

これに対して、近代科学思想を支持する科学者は、経験主義的な実験を重視して、自然界の出来事を解

明しようとする。彼らの実験は、オカルト的研究によって導き出されてきた帰結を疑問視し始めた。彼らにとって、天と地の創造ですら、国家への服従を強制するためのフィクションにすぎない。この近代科学的理念が、保守的な陣営にとって脅威の的となったのである。そして、当局は経験主義に基づく科学者を悪魔扱いすることになる<sup>(4)</sup>。

その槍玉とされたのは、何も近代科学を標榜した科学者ばかりではない。ときの有力者レスター伯 (Earl of Leicester)、クリストファー・ハットン (Christopher Hatton)、サー・ウォルター・ローリー (Sir Walter Raleigh) を中心とするプロテスタントは、航海術や地理学の進歩がスペインを打ち倒し、イングランド帝国を建設できると考えて、オカルト主義自然哲学を疑問視したとき、当局から異端者の烙印を押されたのである<sup>(5)</sup>。ジャン・ボダン (Jean Bodin) やジェームズは、自然哲学の革新を望む彼らの姿勢にサブヴァーシヴな宗教的、政治的転覆性を見出し彼らを弾圧する<sup>(6)</sup>。中でも、ボダンは、近代科学を悪魔的实践とみなし、それが国家にもたらす大規模な反乱を危惧する<sup>(7)</sup>。

それにもかかわらず、1584年に出版されたレジナルド・スコット (Reginald Scot) の『魔術の暴露』 (A Discoverie of Witchcraft) は、悪魔の手先と目されたものによる超自然的な現象を疑問視する傾向に拍車をかけた。スコットは、魔女の存在を認めていたものの、魔女に帰される秘跡を単なるメランコリックな幻覚であると主張する<sup>(8)</sup>。さらに、彼はその秘跡を単なる迷信であると表明して、読者に理性的、懐疑的な姿勢をとるように促したのである<sup>(9)</sup>。こうした姿勢は、後に近代科学思想の提唱者となったフランシス・ベーコン (Francis Bacon) が「実験主義」の妥当性を論じた姿勢とつながってくる。ベーコンは、1620年に公刊された論文の中で「自然界の知識を獲得するには、帰納的なアプローチをして、一連の統制された証明できる実験」を重視する<sup>(10)</sup>。

だからと言って、スコットやベーコンの近代科学思想は、必ずしも1580年代以降の自然哲学界で受け入れられたわけではない。例えば、トマス・エラストス (Thomas Erastus) は、伝統的な自然哲学が聖書の記述に基づいて構築されていることに着目し、それが神の真理であると説いた<sup>(11)</sup>。彼によれば、これに異論を唱えるものはサタンの使いである。彼の理念は、広くイングランドの保守層に支持された。また、ジェームズは、1597年に対話体の『悪魔学』 (The Daemonologie) を出版して、スコットの革新的な思想に反論し、保守的な思想を維持しようとした<sup>(12)</sup>。

こうした事実から、シェイクスピアが劇作家として活躍した時代は、相反する自然哲学ひいては悪魔観がせめぎあっていたことになる。そのせめぎあいの中で、シェイクスピアは、マクベスの言動を通して、悪魔が実在するとも、幻覚にすぎないともとれる悪魔観を描き、ジェームズの政治体制に疑問を投げかける。以下においては、『マクベス』における悪魔観を、1580年前後の経験主義思想を出発点として、これを危険視して出版されたジェームズの『悪魔学』を経て、1620年に表明されたベーコンの「実験主義」を帰着点とした近代科学思想の進展にたどってみる。その結果、劇中で当時の悪魔観が疑問視されたことは、マクベスの死が簡単に父権制度に回収されない側面を映し出し、逆にその制度を絶えず脅かす転覆的な側面をはらんでいたことを明らかにしてみたい。

## I

劇中のマクベスが生きた父権的な魔術世界の価値観は、最初から最後まで変わらない。シェイクスピアは、この時代の伝統的な悪魔観を劇全体の枠組みとして構築して、その世界に生きる人物に悪魔が実在するとも、幻覚にすぎないともとれる姿勢を描き、ジェームズの父権制度に疑問を投げかける手法をとる。まず『マクベス』の冒頭では、当時の伝統的な悪魔観が描かれる。雷鳴と稲妻のさなか、三人の魔女とおぼしき人物が登場し、「きれいは汚い、汚いはきれい」(一幕一場11行)<sup>(13)</sup>と唱える怪しげな言葉で開幕する。

三人の魔女は、それぞれ魔女を特徴づける使い魔を連れている。雷鳴と稲妻という設定に加えて、荒野

でマクベスに会おうとする彼女たちの言葉は、この劇が異様な魔術世界であることを想像させてくれる。一般的に、魔女は人里離れた場所に出現するという当時のオカルト的悪魔観を考慮に入れると<sup>(14)</sup>、その期待は否が応でも膨らんでくる。

その期待に応えるかのように、魔女の一人は、栗をくれなかった女性の亭主で「タイガー号」の船長を、嵐を引き起こして苦しみ「九九、八十一週」の間眠らせず、骨と皮ばかりにやつれさせてやると言う。当時の魔女裁判を記録した『スコットランド便り』(*Newes from Scotland*, 1591-92)の中にも、魔女が篩に乗って空を飛び、嵐を引き起こすくだりがある<sup>(15)</sup>。しかも、再び登場した魔女は、次のような呪文を唱えて、当時保守層の間で信じられていた魔女そのものであることを強く印象づける。

The Weird Sisters, hand in hand,  
Posters of the sea and land,  
Thus do go about, about:  
Thrice to thine, and thrice to mine,  
And thrice again, to make up nine  
Peace! —the charm's wound up.

(I. iii. 32-37)

その魔女は、荒野でマクベスとバンクォーに会い、マクベスには将来国王となると予言し、バンクォーには彼の子孫が国王となると予言する。これらの予言の後、魔女は「大気の中へ... 息が風に溶け込むようにふっと消え」てしまう。この劇が、1607年にデンマーク国王クリスチャン四世が、義兄にあたるイングランド国王ジェームズを公式訪問した際の御前公演であったことを考えれば、魔女の登場と予言は、悪魔学に凝っている彼にお誂え向きの主題を提供したかもしれない。

また、神に敵対する悪魔の手先である魔女の登場は、神の代理人を自認するジェームズの支配原理を強化する上で絶好の素材であっただろう。すなわち、聖油を塗られ、王権を神から授けられた王である以上、神に叛く悪魔がジェームズの最大の敵となり、彼の抱く王権神授説をいっそう確信させたと考えられる<sup>(16)</sup>。事実、魔女を悪魔の手先とする見方は、ジェームズ支配のイングランドで強められていった。魔女は社会的逸脱か反乱を意味しており、魔女を迫害することは、社会を統制する手段となったのである<sup>(17)</sup>。

そこに、シェイクスピアは、当時のオカルト的悪魔観に疑問を呈する新たな見解を織り込み、ジェームズの父権的な制度を脅かし始める。劇中のバンクォーは、魔女の存在に疑問を抱き「もしかしたら、二人とも間違い草の根をくらい、理性が金縛りにあっておかしい夢でも見たのかな」(一幕三場84-85行)と述べて、オカルト主義者の悪魔観に疑問を投げかけるのだ。このように、魔女の予言に疑問を呈する姿勢は、バンクォーの言葉においてさらに展開する。マクベスにそなたの子孫が国王となると語られたとき、バンクォーは「あまり本気にしすぎるな」(同120行)と彼をたしなめるのである。

## II

ところが、予言が的中したマクベスは、バンクォーの忠告とは逆に、まともに魔女の言葉を受け入れてしまう。歴史では、マクベスが国王となるのは全く不可能なことでなかった。彼はケネス二世の孫にあたり、王家一門の中で有力な人物であった。そして、王位継承には系図上の優劣はなく、王族で最も有能な者が王位に就くというのが慣例であった。これについてホリンシェッド (*Raphael Holinshed*) は、『年代記』の中でダンカン(1590)は柔和で温厚であったものの、統率力に欠けていたため、たびたび反乱に悩まされていたと記述する<sup>(18)</sup>。さらに、その『年代記』には、彼の政治的無能力がマクドナルドの反乱を引き起こし、その鎮圧のため生命を懸けて戦ったのがマクベスだとある<sup>(19)</sup>。彼が王位に就いたのは、当然の成り行

きであった。これらのことを考慮すると、劇中のマクベスに最初から王位継承の野心があっても不自然ではない。

シェイクスピアは、その歴史の中にマクベスが王位を狙うことを考えて恐怖に戦慄する場面を作り出し、ジェイムズの悪魔観とは真っ向から対立するものを描き続ける。すなわち、国王ダンカンが長子マルカムを王位継承者と定めたとき、シェイクスピアは、マクベスの心の中に王位を狙うという黒い野心を沸き上がらせるのである。

Stars, hide your fires!  
Let not light see my black and deep desires;  
The eye wink at the hand; yet let that be,  
Which the eye fears, when it is done, to see.

(I. iv. 50-53)

オカルト主義自然哲学を信じる者にとって、マクベスは悪魔にとりつかれている。彼らによれば、悪魔にとりつかれる者は、知識欲に駆られている者、復讐欲や野心に満ちた者である。悪魔の手先は、こうした人物の心のすきから入り込んでくる。このことは、国王ジェイムズが『悪魔学』の中で強調していた点であった<sup>(20)</sup>。しかも、後に続く場面からわかるように、マクベスは大胆にも「おれの永遠の宝(魂)を人類すべての敵(悪魔)に引き渡した」(三幕一場67-68行)と白状する。これは、彼が悪魔と契約を結び、死後の魂を悪魔に引き渡すことと引き換えに、魔力や欲望を手にしたことを意味する。

しかし、マクベスは、本当に悪魔の手先と化したのだろうか。これを考えるには、マクベス夫人の場合と比較しなければならない。マクベスからの手紙を受け取った夫人は、確かに「運命」と「超自然的な力」を信じ、悪魔の力に頼ろうとする。王冠を手に入れるためには、「死をたくらむ思いにつきそう悪霊たち、この私を女でなくしておくれ」(一幕五場40-41行)と祈願することも厭わない。ここで彼女がしていることは、悪霊を呼び込んで、自分の本性と交わらせる悪魔の儀式であると考えられる。

さらに、夫人は、いったん誓ったら、乳を飲む赤ん坊の口から「乳首をもぎとって、その脳味噌をたたき出す」(一幕七場57-58行)ことすらできると言う。悪魔への臣従の誓いとして、幼児を悪魔に捧げることを思い起こすとき、マクベス夫人は、悪魔の手先たる魔女となったと言えよう。そのマクベス夫人は、国王殺しをためらうマクベスに「しっかりしなさい、暗い顔色は恐れている証拠、さっさとお捨てなさい」(一幕五場71-73行)と叱咤する。悪霊と自分の本性を交わらせた夫人には、国王暗殺に対する恐怖心はなく、悪魔の手先として目的に向かう。

夫人の言葉で重要なことは、マクベスに恐怖心があることを指摘していることだ。ここにマクベスと夫人との性格にずれが生じている。恐怖に怯えるマクベスは、悪魔にとりつかれていると言えるのだろうか。16世紀末、17世紀初頭に書かれた魔女に関する記事では、悪魔にとりつかれた人間に恐怖心は見られない<sup>(21)</sup>。とすれば、マクベスは完全に悪魔にとりつかれているのではない。これについて、この時代の近代的自然科学者ないし魔術の存在に異論を唱える者は、悪魔にとりつかれた人間の言葉をメランコリックな幻覚と考えた<sup>(22)</sup>。劇中でも同じことが示される。ダンカンを殺害した後、空中に浮かぶ短剣を見たマクベスは、それを幻覚にすぎないと叫ぶ。

Art thou not, fatal vision, sensible  
To feeling, as to sight? or art thou but  
A dagger of the mind, a false creation,  
Proceeding from the heat-oppressed brain?

(II. i. 36-39)

さらに、マクベスは「目だけはたしかで、ほかの感覚がおかしいのか」(同44-45行)と自問を続ける。マクベスの自問は、保守的なオカルト主義者の悪魔観に対する疑問と考えられないだろうか。

### III

しかしながら、前に述べたように、劇全体の枠組みを構成する、父権的な魔術世界そのものは変わらない。ダンカンが殺害された日の夜、自然界に異変が生じる。保守的な思想家にとって、国王は宇宙の中心であり、自然界の秩序の本源であった。そうした自然界の摂理が人間によって破壊されたとき、異変は天地宇宙にまで波及する。劇中のスコットランドの貴族ロスは、これについて次のように述べる。

Thou seest the heavens, as troubled with man's act,  
Threatens his bloody stage: by th'clock 'tis day,  
And yet dark night strangles the travelling lamp.

(II. iv. 5-7)

同じように、地獄門の場で、激しく扉をたたく音に「地獄の門番」を思い浮かべる門番の声は、殺人の場と化したマクベスの城が地獄と重なる。これらは、自然界の摂理が死滅した混沌そのものを象徴している。従って、マクベスは、体制側のポリティックスの中で、ときにはその悪魔観を肯定し、ときにはそれを疑いながら生きている。

もちろん、超自然的な力の介在を疑問視することは、神とその代理人たる国王を頂点とする父権的な支配原理を根底からくつがえしてしまう。オカルト主義哲学者が危惧していた点は、まさにここにあった。劇中の父権的な支配原理が終始変わらないのは、その理由のためでもあろう。それにもかかわらず、シェイクスピアは、さらにジェームズの支配原理を疑問視する。悪魔の手先と化したはずのマクベスは、再度幻覚に悩まされるのだ。バンクォーを暗殺者に殺害させた後の祝宴で、マクベスはバンクォーの亡霊を見て大いに取り乱してしまう。

そして、バンクォーの亡霊は、マクベス以外の誰にも見えないから、それは良心の呵責が彼に見させる幻覚とも考えられる。この見解に呼応するかのように、マクベス夫人は、彼が見たと言うものを「あなたの恐怖心が描き出す幻覚にすぎません」(三幕四場60行)と断言する。亡霊の存在すら信じない近代科学思想の影響を受けた科学者にとって、亡霊は良心の呵責による恐怖心が描き出す幻覚である<sup>(23)</sup>。これについて、マクベスは次のように言う。

My strange and self-abuse

Is the initiate fear, that wants hard use:

We are yet but young in deed.

(III. iv. 141-43)

マクベスは、悪魔の手先になろうとしてもなりきれない。このように、シェイクスピアは、マクベスの言動を通して、悪魔ないし悪魔の手先が実在するとも、幻覚にすぎないとも思えるような悪魔観を描き、ジェームズの支配体制を揺さぶり続けるのである。

事実、1590年代には、ローリーやドレイクたちの要求に応じて、科学技術の振興を目的としたグresham・コレッジ (Gresham College) が設立された。このコレッジに所属する研究者は、プトレマイオスの天動説といった伝統的権威を否定し、コペルニクス主義や宇宙の無限性を主張した。彼らは、天と地の存在や霊の不滅を受け入れず、その創造主の存在すら疑問視する。その結果、ジェームズの父権的な制度

は、大いに揺らぎ出すことになったのである<sup>(24)</sup>。

ところで、マクベスが苦悶している間、彼を反逆者とするマクダフたちがイングランドに集合し、反乱の準備を整える。この場面で、もう一度、劇中世界は父権的な魔術世界であることが確認される。ダンカンが殺害されて以来、スコットランドは、マクベスによる暴政に苦しみ、マルカムは彼を「悪魔」（四幕三場117行）と呼ぶ。言い換えれば、スコットランドは悪魔に支配されている。これとは逆に、イングランドの王は病人を治す奇跡的な力を備えていると、イングランドの医師は言う。

そればかりか、イングランドの王は「予言の能力をもっている」（同157行）とマルカムは続ける。言ってみれば、イングランドの王は神のごとき人物である。このような人物が支配する世界では、それに敵対する人物が不可欠となる。事実、相反する悪魔観がせめぎあっていた時代、ジェイムズは、地上世界に対する悪魔の矢面に立っていると考えて、エリザベス時代に制定された魔女取締法を不完全なものとして改め、より厳格なものを制定した<sup>(25)</sup>。劇中で魔女の力を頼みとするマクベスは、再びジェイムズの支配原理を維持する上で格好の人物にすりかえられる。

#### IV

ところが、劇中では、繰り返し体制側の支配原理が揺さぶられる。反乱軍はマクベスを悪魔として認識していないのだ。反乱軍は、国家が乱れた原因をマクベスの暴政に帰している。反乱軍の一人メンテースは、彼を「暴君」と呼んで、国家の安定のために武器をとる。また、ダンシネーンの城を固めているマクベスの様子を語るケーネースの言葉は、彼の悪魔性を表していない。

Some say he's mad; others, that lesser hate him,  
Do call it valiant fury: but, for certain,  
He cannot buckle his distemper'd cause  
Within the belt of rule.

(V. ii. 13-16)

ケーネースの言葉から、スコットランド国民は、国家の混乱を国王殺害にまつわる自然界の混乱に求めているのではなく、マクベスの狂気に求めていることがわかる。これは、経験主義に基づく科学者の見方と通じるものがある。科学的な根拠に基づく自然界の異常現象は、バーナムの森が動く原因をも容易に説明してくれる。バーナムの森が動くのは、反乱軍の兵力をくらますのに、マルカムが兵士に「あの木の枝を切りとって、頭上にかざして進む」（五幕四場4-5行）ように命じた結果である。これを魔女による予言として疑わないマクベスは、まさに狂乱から生じる幻覚に冒されていると言っている。

さらに、マクベスは「女から生まれた者」に倒されることはないとかたくなに信じていた。マクダフにしてみれば、それは単なる「まじない」（五幕八場13行）にすぎない。彼は悪魔の存在を信じていたかもしれないが、それが行使する魔術を信用しない。彼はマクベスが信じる予言を、次のように侮蔑的に科学的根拠に基づいて論駁する。

And let the Angel, whom thou still hast serv'd,  
Tell thee, Macduff was from his mother's womb  
Untimely ripp'd.

(V. viii. 14-16)

事実を知って愕然とするマクベスは、魔女を「二枚舌を操る鬼ばばあ」（同19-20行）と非難する。オ

カルト的悪魔観に従えば、確かに、マクベスは「真実と見せて嘘」をつく「二枚舌」の魔女の予言に操られ、翻弄されたのかもしれない。その意味では、マクベスが殺害されることで、王国には再び元の父権的な魔術世界が回復される。それは、ジェームズが望んでいた政治世界であった。

しかし、これまで論じてきたように、シェイクスピアは、悪魔が存在するとも、幻覚にすぎないともとれる悪魔観を描く。それが意味することで重要なことは、ジェームズの悪魔観ひいては政治理念が絶えず疑問視されたことだ。そのことは、マクベスの死が簡単にジェームズの父権制度に回収されない側面を映し出しており、逆に転覆的な側面をはらんでいることにほかならない。実際、ジェームズが議会で王権神授説を表明して以来、彼の政治体制は崩壊の道をたどったのではないか。また、彼の期待とは裏腹に、魔女裁判が減少したことは、彼の父権的な政治体制が功を奏さなくなったことを能弁に物語っている。時代は、確実に近代科学思想を受け入れつつあったのだ。

Critics tend to examine if witchcraft in *Macbeth* reflected real 'evil' in Jacobean England. As for this problem, Peter Stallybrass concludes that the witchcraft was not a reflection of a real 'evil' but the social strategy to strengthen the patriarchy of King James. James was a deputy of God, and needed witches as his enemy so that he could control his society. His conclusion seems to be influential in understanding this play.

The problem is that Macbeth and Banquo regard witchcraft as an illusion, and are skeptical about witchcraft beliefs. Their skepticism means subversion of the James's constitution. In fact, the development of modern scientific ideas in this period encouraged scientists to subvert the idea of occult philosophy, which supported the politics of Renaissance England. This modern science also threatened the government control over the society. Jean Bodin, a politic theorist, and James found the religious and political subversion in the revolutionary awareness of the scientists, and suppressed them.

Two kinds of attitudes to the witchcraft belief conflicted between the government and modern scientists in the period when Shakespeare wrote *Macbeth*. The dramatist presented this conflict in the play through the action of Macbeth. He questioned the politics of James. The present paper examines the witchcraft belief in *Macbeth*, considering the development of modern science from empiric science in the 1580s to the experimentalism Francis Bacon proposed in his essay in 1620. It may be given as a conclusion that the play shows that the protagonist always threatened the politics of James by doubting the witchcraft beliefs in the period.

## 注

※本稿は東北英文学会第55回大会（平成12年10月8日、福島大学）の「英文学における悪魔像 ― 中世末期からロマン主義時代まで ―」と題したシンポジウムにおいて、口頭で発表した原稿を骨子としている。

- (1) Peter Stallybrass, "Macbeth' and Witchcraft,' in *Macbeth*, ed., Alan Sinfield (Hong Kong: MacMillan Education Ltd, 1992), pp. 25 - 38.
- (2) John S. Mebane, *Renaissance Magic & the Return of the Golden Age: The Occult Tradition & Marlowe, Jonson, & Shakespeare* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1989), p.73. オカルト哲学についての研究は、本書に多くを負っている。
- (3) Gerald M. Pinciss and Roger Lockyer, eds., *Shakespeare's World: Background Readings in the English Renaissance* (Continuum, New York: A Frederick Ungar Book, 1989), pp.67-69. レジナルド・スコットからの引用は、すべて本書に収められているものからの抜粋を参考としている。
- (4) Mebane, p.76.
- (5) Mebane, p.79.

- (6) Mebane, p.96.
- (7) Mebane, p.99.
- (8) Gerald M. Pinciss and Roger Lockyer, pp.77-78.
- (9) Gerald M. Pinciss and Roger Lockyer, p.72.
- (10) Gerald M. Pinciss and Roger Lockyer, p.67.
- (11) Mebane, pp.102-103.
- (12) G. B.Harrison, *Elizabethan and Jacobean Journals 1591-1610*, vol.II (London and New York: Routledge, 1999), p. 265.
- (13) 本文のシェイクスピアからの引用はアーデン・シェイクスピア版に拠る。テキストとしては *Macbeth*, ed., Kenneth Muir (London and New York: Methuen, 1980) を使用した。なお、日本語訳は小田島雄志訳『シェイクスピア全集』(白水社)を一部変えて用いさせて頂いた。
- (14) James I, 'Daemonologie, in Forme of ane Dialogue,' in *Elizabethan and Jacobean Quartos*, ed., G. B. Harrison (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1966), p. 58.
- (15) 'Newes from Scotland declaring the Damnable Life and death of Doctor Fian, a notable Sorcerer,' in *Elizabethan and Jacobean Quartos*, ed., G. B. Harrison (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1966), pp. 16-17.
- (16) Godfrey Davies, *The Early Stuarts 1603-1660* (Oxford: Clarendon Press, 1987), p. 8.
- (17) Mebane, p.98. 特に共同体の周縁に生きる寡婦や老女は、時代の社会不安を解消するために、魔女としてスケープゴートにされた。
- (18) Raphael Holinshed, *Holinshed's Chronicles of England, Scotland, and Ireland*, vol. 5 (New York: AMS Press, 1976), p. 265.
- (19) Holinshed, pp. 265-66.
- (20) James, pp. 32-33.
- (21) Harrisonの前掲書 *Elizabethan and Jacobean Journals 1591-1610*に収められている魔女裁判に関する記事を読むと、魔女には恐怖心がなく、悪魔の印が見出されるまでかたくなな姿勢を崩さなかったことがわかる。
- (22) Gerald M. Pinciss and Roger Lockyer, pp.77-78.
- (23) Gerald M. Pinciss and Roger Lockyer, pp.80-81.
- (24) Mebane, pp. 77-78.
- (25) G. B.Harrison, *Elizabethan and Jacobean Journals 1591-1610*, vol.III (London and New York: Routledge, 1999), pp. 150-51.